現代能歌劇「熊野」台本　原作：能「熊野」世阿弥作とも金春禅竹とも言われる

舞台＝舞台背面は「鏡板」に替わる満開の桜の垂れ幕がある。垂れ幕の前には「後座」または「出囃子」にならって、雛壇に9名の演奏者が椅子にかけて列ぶ。ステージ上手「地謡座」の位置に混声四重唱(又は混声合唱)が椅子にかけて列び、歌うときには立唱する。

混声四部合唱＝各声部2名　計8名程度。

管弦楽＝Fl. Ob. Cl. Fg.各1。弦5部(Vn.1 Vn.2 Vla. Vc.各1)。Piano 1。

時 と 所＝平安時代の京都、桜花爛漫の季節。

登場人物

在原熊野(仕手・シテ)＝平安時代の歌人在原業平とその妻(父が紀有常(きのゆうじょう))との間に生まれた娘。

朝顔(連れ・ツレ)＝在原家の召使い。

平宗盛(脇役・ワキ)＝平安時代の武将。清盛の第2子。

平清宗(脇連れ・ワキツレ)＝宗盛の実子。

第一場「平宗盛の館」

名乗り

清宗　(ステージ裏より)父上、(下手より登場)桜が満開ですね。

宗盛　そうだな清宗。熊野を伴って、皆で花見に出かけたいものだな。

清宗　満開の桜の下で、熊野殿の美しい舞姿を見ることができたら、最高でしょうね。

宗盛　そうしたいものだ。

清宗　熊野殿と言えば東国にいるお母上がご病気だそうですね。それで、たびたび父上の所に暇乞いに来ていると聞いておりますが。

宗盛　そうなのだが、満開の桜が咲くこの季節に、熊野とともに花見もせずに東国に帰す気持ちにはなれんのだ。

清宗　それはそうですよ。(－間－) 熊野殿がたびたび暇乞いに来るのには、別の理由があるからだという噂を耳にしましたが、父上はご存知ですか。

宗盛　どういう話だ。

清宗　本当なのでしょうかね、熊野殿のお母上がご病気だというのは?(－間－) 東国に幼なじみの恋人が遠江にいて、その恋人に会いたいから暇乞いに来るのだという噂です。

宗盛　まさかな。由緒ある在原業平家の娘熊野がそのような理由で暇乞いをするはずがない。まして天皇家と昵懇の紀家から嫁いだ母御に育てられた熊野だよ。

二重唱

清宗　紀家から嫁いだ母御に。

宗盛　噂話のような思慮を欠いた理由で暇乞いなどはしないだろう。

清宗 ⎫ 噂話のような思慮を欠いた理由で暇乞いなどはしないでしょう。しないでしょう。

宗盛 ⎭ 噂話のような思慮を欠いた理由で暇乞いなどはしないだろう。しないだろう。

合唱　熊野御前が参られました。

Ten.　遠江池田の在原業平家の熊野。

――――――　間　――――――

熊野　(朝顔とともに下手より登場)宗盛様、熊野でございます。

宗盛　おお、熊野か。よく来たな。会いたかったぞ。

熊野　これは清宗様も、お久しぶりでございます。

清宗　熊野殿、いつもながらお美しい。今日はまた一段とお美しく輝いて見えますよ。

熊野　ありがとうございます清宗様。宗盛様、だびだびお願いに参上して申し訳ございません。本日は私の郷里、遠江の国池田よりこれなる朝顔が参上いたしました。病の床に伏しております母の手紙を朝顔が持参いたしました。今日はこの手紙をお目に掛けて、母のもとに帰れますよう、再びお願いに参上いたしました。

宗盛　朝顔か、よく来たな。

朝顔　初めてお目に掛かります。遠江の国池田の在原業平家につかえる朝顔でございます。

熊野　母の病がとても重く、このたびは朝顔にこの手紙を持たせて参りました。申し訳ございません

が、お読み頂きとうございます。

手紙の段

宗盛　母上からの手紙と申すか。私が読むまでもない、熊野がそこで大きな声で読んでくれ。

熊野　かしこまりました。それでは、読ませていただきます。「年を取って病の床に伏している私には、この春の宵にも心晴れません。秋の月夜も、ただ長く感じられるだけになりました。今はただ、死に行く身の定めを逃れることもできずに、日々を床に伏して過ごしております。三月頃に書いたように、老いた桜のようになった私は、今年最後の花を咲かせて、この世を去ることになるではないかと、心細く思うようになってしまいました。ただただ涙にむせぶばかりです。

暫しのお暇を頂いて、もう一度だけ病の母に会いに来ておくれ。宗盛様に心を込めてお願いしておくれ」。

清宗　お母上は、たいそうお加減が悪いようですね。

朝顔　はい、お母上は病の床に伏せって毎日を過ごしておいでございます。

熊野　「親子は一緒に暮らしていなければ、親孝行はできません。返すがえすも命のあるうちに、今一度だけ私はお前に会いたいのです。

年を取った今となれば、避けることのできない別れが来ると思うと、いよいよお前に会いたい。どうか、お暇をいただいて、今一度母に会いに来ておくれ」。

清宗　お母上は熊野殿と共に暮らせず、お淋しそうですね。お可哀想に。

Sop.1　「この世の親子の別れがなくなって、ずっとずっと母と一緒に暮らていたいと祈ってくれる我が子に、ひと目でも会いたいのです」。

清宗　私の母が熊野殿のお母上のように病の床についたなら、私も同じように悲しみに暮れるでしょうよ。悲しみに暮れるでしょう。

朝顔　左様でございます。お母上様が本当にお可哀想でございます。

宗盛　私も同情しているのだ。可哀想だと思っているよ。

Sop.2　「もう一度だけ会いに帰っておくれ、老いた桜が花も咲かせずに倒れてしまう前に、帰って来ておくれ。今年の桜を見るすべもなく、死にかけた老いの鶯の望みを叶えておくれ」。

合唱

合唱　甘泉殿（かんせんでん）の春の夜の夢、はかなき想い出となり、驪山宮（りざんきゅう）の秋の月夜の誓いも、終わりを避けること叶わず。万民救済の説法を施されたお釈迦様も、生死の定めは逃れ給わず。

熊野　どうかお暇を賜り、遠江に下るお許しを頂きとうございます。

宗盛　それで手紙は終わりなのか。私も同情しているのだ。

熊野　宗盛様、熊野は宗盛様に仕える身でございますが、今は遠江の母の病が心配でなりません。お側に仕える身でありながら大変申し訳なく存じますが、病の母の所に飛んで帰りたいと思うばかりでございます。どうかお暇を賜り、遠江に下ることをお許し頂きますよう心を込めてお願い申し上げます。

清宗と朝顔の二重唱

清宗　千秋の思いで熊野殿の帰りを待っておられる母上のところに帰りたい。
朝顔　千秋の思いで熊野殿の帰りを待っておられる母上のところに帰りたい。
清宗　このように、美しく育ててくださった、母上のところに帰りたい。
朝顔　このように、美しく育ててくださった、母上のところに帰りたい。

二重唱＋合唱

「熊野様のお心は、春雨に濡れる桜の花の如くでございます」。

宗盛　何とでも言いなさい。私も同情していると言っているのだ。

朝顔　（熊野の肩を抱いて）熊野御前様ご安心ください。宗盛様は同情してくださっていらっしゃいます。間もなくお暇乞いをお許しくださるに相違ございません。

熊野　本当でしょうか？

―――――　間　―――――

宗盛　母御の病は可哀想だと思うが、すぐに別れの時がくることもないであろう。この満開の桜の季節に、熊野と伴に花見に行くことをどうして諦められようか。

朝顔　宗盛様、お言葉を返すことをお許しくださいませ。桜の花はまた、春が巡ってくれば満開になります。でも、熊野御前のお母上は、今帰らなければ永遠の別れになるかも知れません。
ただただ熊野御前にお暇を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。
宗盛　いやいやそのように、心の弱いことを申すものではない。私に任せておきなさい。これから熊野の悲しみを慰めるために清水寺に花見に行こう。皆で花見の車に乗って行こう。
清宗、花見の車を用意させなさい。(下手に退場)
清宗　畏まりました。牛飼い、花見の車を用意しなさい。急いで花見の車を用意しなさい。
(下手に退場)
合唱　花見に行こうと勧められても、心は先に行きかねる。足どり重き熊野の心中なり。
(合唱の中、能「熊野」に使われる車と同じ形の花見車が舞台に出される。熊野が朝顔に手を引かれて車の中に入り、朝顔は傍らに立つ)

―――――――― 暗転 ――――――――

第二場「花見の宴」

舞台＝清水寺の満開の桜が描かれた垂れ幕に換えられている。舞台に花吹雪が舞っている。
第一場と同じ花見車の中に熊野がいて、朝顔は車の傍らにたっている。

車の道行き
序奏　音羽の山桜の風景描写
合唱　その名も清らかな、清水寺へと尋ね来れば、
賀茂川の清流の彼方に、音羽の山桜。
山の向こうに 山があって、山尽きず、
路の向こうに 路があって、路尽きず。
山青く 山桜が香り、白雲が行き来する。
熊野　東路にきて東山、東の故郷がなつかしい。
朝顔　誰が言ったのでしょう、春の景色は東からやって来ると。
その通り、春の景色の東山。まことのどかな東山。
合唱　四条五条の橋の上、
老若男女貴人と庶民。
都も田舎も色めく花衣 。
袖を連ねて行き交う先に、
雲と見まがう八重一重、
咲く九重の花の都。
名に相応しい春の景色。
熊野　人はみな春を楽しみ、人はみな心に憂いを持っています。これもみな人の世の常です。
憂いを持ちながら、春を楽しむ。人の世は、みなそうなのでしょう。
朝顔　熊野様、賀茂川沿いを過ぎて、大和大路に差し掛かります。六波羅の地蔵堂でございます。
熊野　ここは観音様も同座されています。万民救済の御利益もあらたかに、わが母のために拝みましょう。わが母を守り給え。(車の中で、合掌し祈る)。
合唱　春の日よりを行く車、程なくここは清水寺。
朝顔　御前様、清水寺の車宿りでございます。お車をお降りになってくださいませ。
熊野　清水寺に着きましたか。
(朝顔が手を取り、熊野が車から降りる。花見車が下げられ、熊野がステージ中央に立つ)。
地謡(Sop.1)春爛漫の清水寺の桜。
熊野　それでは清水寺の観音様に心を込めてお願いしましょう。
観音様、どうかわが母を守りください。私はお母様の所にとんで帰りたいのです。どうかわが母に会うことができますように。(正面へ出て、ひざまずいて合掌する)。

―――――― 間 ――――――

花見の宴

清宗　(ステージ裏より)熊野殿、熊野殿。(下手より登場)こちらにおいででしたか。早速、花見の宴を始めましょう。

朝顔　畏まりました。早速始めたいと存知ます。

宗盛　(下手より登場)おお、おお熊野、ここに居たのか。花見を始めようではないか。

熊野　(祈りの姿勢をといて立ち上がり、明るく朗らかな風情になって)畏まりました。早速始めたいと存じます。

さあさあ皆様方、もっと花の近くへいらっしゃいませ。桜の花が満開でとても美しいではありませんか。今を盛りと咲き誇っております。

(宗盛が用意された床几へ行き、熊野は宗盛の後ろに立つ)

――――――　間　――――――

朝顔と清宗の二重唱(ステージ中央に立つ。熊野は宗盛に酒をつぐ。)

清宗・朝顔　胡蝶が、満開の桜に粉雪のように舞っています。
鶯が柳の枝に飛び交い、ひらひらと金色に輝いています。
桜の花びらが、水の流れにのって、香りがただよっています。

熊野のアリア(ステージ中央にて。清宗と朝顔は宗盛の両脇へ、朝顔は宗盛に酌をする)

清水寺の鐘の音は、祇園精舎の鐘のように諸行無常の響きがいたします。
地主権現の桜(はぞ)の色は沙羅双樹の花のように、生きるものは必ず滅びる世のならいを物語ます。
南を遙かに眺めば、大悲擁護の薄霞み、熊野権現をお移しした今熊野が臨めます。
清水寺の観音様に、千々に乱れ咲く花の如く、ささえあって生きる幸せをお与え下さるようお願い致しましょう。

宗盛　どうだ熊野、熊野の舞をひとさし見せてもらいたいのだが。

熊野　かしこまりました。ひと差し舞わせていただきます。

(熊野はステージ中央で、合唱に合わせて舞う。原曲は笛・大小鼓の優雅な舞)

合唱　音羽山　音なき嵐　花吹雪、音なき嵐　花吹雪
深き情けを　誰か知るらん。母への思いを　誰か知るらん。

――――――　間　――――――　(花吹雪がいったん止み、村雨が降ってくる。)

村雨の段

合唱　村雨の 降るは涙か桜花、散るを惜しまぬ 人はいるらん。

宗盛　おお、村雨か。花散らしの雨だ。花が散るのを惜しまぬ人はおるまい。

地謡　雨にぬれて、桜の花がちる。
(Alto)

――――――　間　――――――

(熊野は朝顔から短冊と筆を受取り和歌をしたためる。和歌を扇にのせて宗盛に手渡す)

宗盛　歌をしたためたのか。何やら曰くありげな歌だ。どれ、歌ってみよう。
「如何にせん 都の春は惜しかれど 馴れし東の花や散るらん」。
都の春を見ないのも惜しいが、故郷遠江の桜が散ってしまうのが心配か。
道理だな、このように満開の桜を見ても、母御の病に心が痛むのか。
熊野の胸の内がわかる。熊野が可哀想だ。

地謡(Bar.)母を思う胸の内、帰ってあげたい胸の内。
熊野、暇を取らそうぞ。早く母御のもとへ帰ってあげなさい。

(村雨が止み、花吹雪が再び舞い落ちる)

熊野　本当ですか。お暇をくださるのですか。

宗盛　本当だ。暇を取らせるぞ。早く、帰ってあげなさい。

熊野　母の元に帰ります。まあ、嬉しい。有り難いこと。これも観音様の御利生(御利益)の賜です。

有り難いこと。もったいない仰せでございます。
東下り
朝顔　(熊野に抱きつく）熊野様よかったですね。これでお母上のもとに帰れます。
私はどうなるかと思っておりました。
熊野　ありがとう。本当に嬉しいです。
清宗　熊野殿、遠江に帰れますね。よかったですね。お母上を大切になさってください。
熊野　ありがとうございます、清宗さま。本当に嬉しゅう御座います。私は宗盛様からしっかりとお許を頂いて帰りたかったのです。
朝顔　それでこそ熊野様でございます。さあ、お帰りの旅のお支度をお手伝いいたしましょう。
四重唱
東路さして行く道の、やがて休ろう逢坂の
関所の人も心得て、明け行く後に山見えて
花を見捨てて雁行く道は
朝顔　それは越路
熊野　我はまた、東に下り
四重唱
花の都が名残惜しきかな
花の都が名残惜しきかな
花の都
（熊野と朝顔は、下手の舞台端にて深く一礼、退場する）

幕